

2014 年度前期 授業評価アンケート結果に対するコメント

—経済学研究科—

経済学研究科長 浅井良夫

アンケート調査に対する大学院学生諸君の協力に感謝いたします。

今年度前期の大学院全体の集計結果から見て、大学院の授業は、全体としては、昨年度後期と同様に高い評価が得られたと思います。これは、日頃から徹底した少人数教育を実施し、密度の濃い、双方向の授業がかなりの程度実現していることの現われでしょう。

個々の項目の平均評点を、昨年度後期と比べた場合、ほとんど違いがなく、ほぼ誤差の範囲内だと考えられます。したがって、昨年度と大きな変化はないと言えます。4.5 に満たなかった項目は、前回と同様、「予習または復習をよくした」の1項目だけでした。また、いずれの項目についても、5段階で3以下の評価がほとんどないことも大変に結構なことと考えます。さらに、「教員の熱意を感じた」という項目の評価がもっとも高い4.87であることから、教員の大学院教育に対する積極的な姿勢が窺われ、大変に喜ばしいことだと思います。

一方、回答の分布の面からアンケートを検討してみると、平均点には現れない問題も浮かび上がってきます。今回のアンケートでは、「予習または復習をよくした」の項目において、5の評価をした学生の割合が、昨年度後期の57.6%から今期は45.7%へと低下し、半分を切ったことは、気がかりです。とくに大学院においては、「自学自習」が重要な意味を持つことを考えれば、今後、教員が学生に対して予習・復習を行うよう、より徹底して指導する必要があるでしょう。

大学院では、学生諸君のそれぞれの専門分野がはっきりしていますが、幅広い知識と多様な見方を、できるだけ多くの教員から学ぶことは、学生諸君の将来にとって大切なことです。今後も、大学院担当教員全員が努力・工夫をして、双方向性を高め、履修者の学習意欲をさらに高めるような授業を展開することが期待されます。